立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１６年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　日本文学専攻		
研究代表者（2017年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程３年	泉屋　咲月　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部・教授	小嶋　菜温子　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題	平安文学における形容語の可能性――賛美表現を中心に――		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程３年	泉屋　咲月	
研究期間	２０１６　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）200,000　円／（採択金額）200,000　円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究では、『源氏物語』を中心とした平安文学における形容語のうち、文脈によって賛美の意味が生じる語を対象とし、そうした賛美表現と本来の意味との関連を考える。とりわけ「たぐひなし」、「ありがたし」という賛美表現を中心に、本来の意味から想起されるイメージと、文脈によって発生した意味との関係、賛美の文脈において本来の意味がどの程度影響を及ぼすのか、また、それによってなにが象られるのかを明らかにする。その上で、なにかを賛美するにあたり、その語が選択された意図や、選び取る際の言語的な感覚、表現意識を探り、そうした言語的な感覚と表現における意識が交錯する領域を明らかにすることをめざす。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　源氏物語　〕〔　賛美表現　〕〔　形容語　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

若菜上巻における女三の宮の登場によって、紫の上は相対化され、同時に登場人物として独自の価値を与えられた。深い内省と苦悩が描かれ、紫の上は独自性を持った理想的女主人公として定位されたのである。このような物語第二部における紫の上をたどると、「ありがたし」という賛美が繰り返し用いられていることに気付く。『源氏物語』において、「ありがたし」の用例は計 128 例認められ、紫の上に対しては 13 例用いられる。第二部における「ありがたし」の用例数を見てみると、紫の上に対して用いられる例が最も多い。紫の上に対して用いられる「ありがたし」13 例のうち、玉鬘巻と野分巻の 2 例を除く 11 例が物語第二部で用いられているのである。

物語第二部において「ありがたし」という表現が紫の上に特徴的に用いられていることは、早くから問題化され論じられてきた。物語第二部において、苦悩する紫の上が「ありがたし」と賛美され理想的な美質が描かれていること、また、若菜巻における紫の上に対する「ありがたし」が、女三の宮との対比において紫の上の優位性が確認される際に用いられていることについて、異論はない。ただ、なぜ「ありがたし」というひとつの表現を繰り返し用いて紫の上を賛美するのかについては、検討の余地が残されていると考えた。そこで、物語第二部で紫の上に対して用いられる「ありがたし」11 例の分布を見ると、そのうちの 9 例が若菜巻で用いられていることがわかる。つまり、物語第二部の中でもとりわけ若菜巻では紫の上に対して「ありがたし」という賛美が多く用いられているのである。この点に着目し、本研究では、若菜巻において紫の上に対して用いられる「ありがたし」という賛美の特徴を明らかにし、この表現が選び取られ、ことさらに繰り返される意味について検討した。

若菜上巻において光源氏が紫の上に対して用いる「ありがたし」について着目したいことは、光源氏が、細かく数え上げるようにして紫の上の美質を確認しているということである。同時に、女三の宮の幼さが批判的に描写されることにも留意される。「ありがたし」という賛美によって、光源氏個人にとって妻として優れているのは紫の上であり、だからこそ紫の上がおとしめられることはないのだということが語られる。しかしこのことが示すのは、光源氏による「ありがたし」という賛美が、出自、身分ともに女三の宮が圧倒的に優位であるからこそ成り立つ、逆説的な賛美であるということである。実のところ、女三の宮との対比の上で紫の上を「ありがたし」と賛美する光源氏の意識の根底には、朱雀院鍾愛の皇女である女三の宮の絶対的ともいえる優位性があるのだ。次に、若菜上巻における明石の君による紫の上に対する「ありがたし」の用例を、その間に配置される光源氏による紫の上賛美とともにたどった。そうしたところ、明石女御に対する訓戒に際しての明石の君による「ありがたし」や光源氏による紫の上賛美が、光源氏と明石の君の紫の上を疎外する意識の表面化を描くと同時に、紫の上が疎外される状況を避ける際の理由を示すために用いられていることに気づく。光源氏と明石の君の意識の上では、紫の上は明石一族の悲願成就という運命と無関係の存在として規定されていた。光源氏と明石の君が、悲願とその成就という明石一族をめぐる運命の上に明石女御を位置づける時、彼らの意識においては、その運命から紫の上が疎外されていく。

若菜下巻の住吉参詣に際し、明石女御の母として重んじられる紫の上が繰り返し語られることもまた、この場から紫の上が疎外されていくことを示していよう。紫の上の立場の不変が語られれば語られるほど、わざわざそう語らねばならない状況が際立つからである。そうすることで、かえって紫の上が変わらず厚遇されることの不自然さ、状況的困難さが強調されずにはおかないのである。また、若菜下巻における光源氏から紫の上に対する「ありがたし」という賛美は、若菜上巻よりも具体的な要素を列挙しながら、その美質を確認する行為として捉えられる。また、若菜下巻においても、紫の上が「ありがたし」とされる時、かならず女三の宮の幼さや未熟さが強調されることで、紫の上の美質と女三の宮に対する優位性が呈示されていく。そして、その優位性を根拠に、六条院の中心的女君は依然として紫の上である、と物語は語ろうとするのであった。

本来、「ありがたし」とは何かの存在を否定する語である。たとえば、「暇ありがたし」などのように用いられ、この場合には賛美の意味は持たない。賛美表現としての意味は、もとの意味から派生したものである。『源氏物語』における「ありがたし」は賛美表現として用いられる用法が圧倒的に多く、元来の存在を否定する用法は 27 例しか認められない。しかしその分布を見ると、第二部で用いられる「ありがたし」39 例のうち、存在を否定する用法が 10 例認められ、第一部、第三部と比較してその割合が圧倒的に高い。つまり、若菜巻では、存在を否定する「ありがたし」が頻出する中に、紫の上賛美の「ありがたし」が繰り返し配置されていることになる。

女三の宮の登場、そして明石一族の悲願成就など、若菜上下巻を取り巻く状況は紫の上の優位性をことごとく脅かす。誰かが紫の上を「ありがたし」と評するとき、そこには紫の上の優位性の喪失、あるいは紫の上が疎外されていく可能性が意識されているのである。しかし同時に、なんとか紫の上を変わらぬ位置にとどめようとする意識も働いている。その中で、紫の上の実質的な地位の不変を語るためには、その必然的な根拠が逐一語られなければならなかった。その際の必然的根拠として、要素を一つひとつ数え上げるようにして確認されていく契機こそが、紫の上の「ありがたさ」であった。「ありがたし」という紫の上賛美は、「存在しない」という「ありがたし」本来の意味で用いられる例が頻出する中にちりばめられることによって、紫の上の美質の希少性を強調している。若菜巻における紫の上に対する「ありがたし」は、単なる常套的な賛美の枠組みを超えて、紫の上の美質の希少性を理由に、その立場の不変を語るための表現として用いられているといってよい。

研究成果の概要　つづき

しかし皮肉にも、「ありがたし」という賛美によって紫の上の美質や優位性が強調されるたび、もはや紫の上の絶対的な優位性を自明のこととして語れなくなってしまったことが浮き彫りになるのであった。

以上のように、本研究では『源氏物語』若菜巻において、紫の上に対して「ありがたし」がことさらに繰り返される意味について検討した。これに加え、紫の上に用いられる賛美表現のうち、光源氏が紫の上に対して用いる「たぐひなし」と「ありがたし」の関連についても検討した。先行研究でも指摘があるとおり、両表現はともに、賛美する人物の賛美する対象を相対化する意識を示す。本研究では、「たぐひなし」、「ありがたし」をたどることで、光源氏の紫の上に対する意識について検討した。

以前、光源氏から紫の上に対する「たぐひなし」に関してくわしく検討した際、光源氏による「たぐひなし」という賛美を、藤壺に対する憧憬・思慕・欲望を紫の上の様相に無意識に重ね合わせる行為として捉え、藤壺以外の女君たちに対するある種の絶対的な優位性を紫の上に付与していたと考えた（泉屋咲月「光源氏にとっての「たぐひなし」―紫の上へのまなざし―」（『立教大学日本文学』第114号、2015年7月）、同「『源氏物語』における「たぐひなし」―光源氏にとっての「たぐひなし」の独自性―」（『立教大学日本文学論叢』15号、2015年9月）」）。これに加え、本研究では、あらたに光源氏が紫の上に対して用いる「ありがたし」について検討した。それにより、若菜上巻においては女三の宮との対比によって「ありがたし」が繰り返され、若菜下巻においてほかの女君たちが賛美される時にかならず紫の上の美質が「ありがたし」という賛美によって強調されることがわかった。光源氏が「ありがたし」と紫の上を賛美する時、そこには紫の上がそれまでの絶対的な優位性を失っていく可能性が示唆されていると考えられる。また、光源氏は紫の上を「ありがたし」と賛美し、その美質を根拠に紫の上のそれまでの位置づけを維持していこうとする。つまり、光源氏による紫の上に対する「ありがたし」という賛美は、紫の上の優位性を強調し、それまでのあり方を維持しようとして用いられているにもかかわらず、実際には、光源氏が紫の上をほかの女君たちと同列に対比していくさまを描いているのである。

そう考えると、光源氏が紫の上に対して用いる「たぐひなし」の最後の用例において、「ありがたき人の御ありさま」に対して「たぐひなし」という賛美が用いられていることに着目される。これまで、光源氏が紫の上を「たぐひなし」と賛美する際に光源氏の視点から見た紫の上の様子が描写されることから、光源氏が紫の上に藤壺を重ね合わせる行為として捉えてきた。この最後の用例以前の光源氏から紫の上に対する「たぐひなし」については、光源氏から見た紫の上の様子が描写されており、紫の上に藤壺を転位する行為として捉えられる。しかし、紫の上に対する「たぐひなし」の最後の用例は、「ありがたき人の御ありさま」を対象にした賛美であるという点で、ほかの用例とは異なる。加えて、紫の上に対する「たぐひなし」のほかの用例が「見る」という語を伴っていたのに対し、この用例だけが「思ひきこえたまへり」と結ばれている点においても、ほかの用例と区別して考える必要がある。この用例について考える際、若菜下巻において光源氏の視点を介した紫の上の様相が描かれることがなくなることは見過ごせない。紫の上に対する「たぐひなし」という賛美は、紫の上の様相をまじまじと見つめ藤壺を転位することで付与されていた。光源氏が紫の上を見つめなくなることと、紫の上に対して「たぐひなし」が用いられなくなることは無関係ではあるまい。若菜下巻に至り、紫の上の様相を見つめなくなった光源氏は、さまざまな要素を列挙し、紫の上を「ありがたき人」とし、その「御ありさま」を「たぐひなし」と「思ふ」のであった。光源氏の中での紫の上は若菜下巻に至り「たぐひなき」人から「ありがたき」人へ変容したのである。

光源氏が紫の上を「たぐひなし」と賛美する時、藤壺に付与する「たぐひなし」の絶対性とは異なるものの、ほかの女君たちに対しては、藤壺に裏打ちされるある種の絶対的な優位性があったといえよう。一方で、光源氏が紫の上を「ありがたし」と賛美する時、そこには、紫の上を、女三の宮や六条院の女君たちとの対比の上で捉えていく意識が見て取れる。光源氏によって「たぐひなき」人から「ありがたき」人として捉えられていくようになることは、光源氏の中で紫の上が相対化されていくことを示す。

藤壺の「ゆかり」として、光源氏の意識の上である種の絶対的な優位性を持つのが紫の上に対する「たぐひなし」という賛美であった。一方で、藤壺の「ゆかり」という要素から外れたところで紫の上を象る表現が「ありがたし」なのである。この二つの表現によって、紫の上が光源氏に賛美される過程をたどると、藤壺の対として光源氏の心を慰める存在から、女三の宮の対の存在、最終的に六条院の女君たちと同軸に据えられ、そのうちのひとりとして捉えられていく紫の上が見えてくる。

以上が本研究の成果である。『源氏物語』以外の作品も含め、本研究で検討した語以外の表現との比較検討に関しては、今後の課題としたい。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文

- 泉屋咲月「『源氏物語』における「ありがたし」――若菜巻における紫の上賛美をめぐって――」（仮題、未発表。『立教大学日本文学』第 118 号（2017 年 7 月刊行）に投稿予定）
- 同「紫の上賛美――「たぐひなし」および「ありがたし」を軸に――」（仮題、未発表。『日本文学』に投稿予定）

④学会発表

- 中古文学会平成 28 年度春季大会、2016 年 5 月 22 日（日）、「『源氏物語』における紫の上への「ありがたし」」（於早稲田大学）
- 日本文学協会第 36 回研究発表大会（古代後期部門）、2016 年 6 月 26 日（日）、「紫の上賛美――「たぐひなし」および「ありがたし」を軸に――」（於岩手県立大学）